

## 新時代のビジネスが動き出す

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 土田 浩

**新**型コロナウイルスの感染拡大とともに、人が大勢集まるイベント・施設は軒並み中止・閉鎖となった。国内の経済活動が復活に向けて急速に舵を切る中でも、人が集中するイベントや施設については、ソーシャルディスタンスの確保を目的に入場者数を大幅に制限するなど、慎重な姿勢で再開に向かっている。

私の身近なところでは、各種セミナーや集合研修が、一時期全面的に中止となった。そして、その再開よりも先んじて、オンラインによるセミナー・研修の開催がいろいろな形でスタートした。シンプルな形式としては、収録済みの講義を、随時ネット上で閲覧できるもの。会員制のセミナーなどで多用されている。これだけでも、各方面の専門家から最新の情勢分析などを拝聴できる貴重な手段である。

**加**えて、新たな試みとして、リアルタイムでのオンライン無料講演会・勉強会が、6月頃から一般公募で続々と開催されるようになった。テーマは、コロナ後の経済・社会、人事・働き方、IT活用、政治哲学など、様々な分野に亘る。

講師・パネラーや司会者は、関西の大学や海外などそれぞれの自宅からの出演であったが、距離感を意識させられることは全くなかった。参加者も多いときは2,500名で、ZoomとYouTubeに振り分けられて同時に視聴した。普段私は1時間ほどかけて大宮から丸の内・大手町界限の会場に通っていたが、移動時間の節約効果は大きい。それにも増して、従来参加が不可能だった地方圏の方々にとっては、情報格差の解消に繋がる有力なツールとなる。

オンライン・リアルタイム形式が従来の対面式よりも優れているのは、講義中にチャットやQ&A機能を使って、気軽に意見や質問を発出できることだ。参加者アンケートなども瞬時に集計されて、それ次第で話の展開も変わる。対面式だと、講義終了後、挙手して指名された者のみが発言権を得るが、往々にして的外れの質問だったり、延々と持論を述べたりという残念

な事態が起きる。これがオンラインであれば、多数の質問が簡潔に文章化された形で事前に司会者に届くので、密度の高い質疑応答になる。

**私**が参加したオンライン・イベントから3つほど、印象的だったフレーズを一言ずつ紹介しよう。

リクルートワークス研究所の「コロナは働く人の意識をどう変えたか?」。4,000人調査のお陰で、自分の手の届く範囲だけでなく、様々な立場・受け止め方に気付いた。「不安の高い人ほど、周囲との関係構築に動く、経験則を一旦棚上げする」、「自分の不安の構造を分析することで、次へのエネルギーとなる」。

ダイヤモンド社の「ニッポンの新人研修を『アップデート』せよ!」。「緊急事態では現状認識がバラバラになるので、センスメイキング(足並み揃え)が重要」、「ポストトラウマティックグロウス(外傷後成長)」という言葉があるが、50年に一度のパラダイムシフトのチャンス、ベテラン・上層部の『元に戻そう』という圧力に屈するな」。

日本経済新聞社の「日経バーチャル・グローバルフォーラム 新型コロナ時代の日本と世界を考える」。講師は、かつてNHK「ハーバード白熱教室」で日本でも著名になったマイケル・サンデル教授。「国の政策に頼る国民が増えることでグローバル化には逆風」、「格差、反発、ポピュリズムが表面化する契機となったが、共通善(連帯感)を忘れてはならない」。

**現**在は試行的に開催されているこれらの講演会・勉強会。やがてはブラッシュアップされて、ビジネス化されることだろう。海外も含め著名な講師が招かれ、安価な受講料で提供されるようになる。勿論、対面式にも、参加者同士の濃厚な対話などの捨て難い持ち味があるので、ローカルな集客や演出の工夫などによって、引き続き多くのニーズを生み出せるだろう。

危機的状況の下で否応なしに導入された試みが、社会の進歩に繋がる日も近いような予感がする。